

第三章

盛岡で本屋として働くこと

1 激変する盛岡の書店地図

大店法から大店立地法へ

さわや書店のことを、僕がそれと認識したのは一九歳の頃だ。一九九六年、いまや永世七冠の羽生善治が、史上初の七冠を達成したのがその年の二月だった。それまで盛岡市の中心市街地に本店を構えるさわや書店と、僕の人生は交わることはなかった。

さわや書店は一九四七年に創業し、岩手県内を中心に現在一一店舗ある。しかし、残念ながら僕の幼少期の活動範囲内に、さわや書店は存在していなかったのだ。

小学校時代の一九八〇年代、世の中は右肩上がりの成長を続けていた。電気機器を小売店に販売する会社に勤めていた父は、ポリーナスが入ると万札が入った分厚い封筒を持って帰ってきた。当時はすでに、銀行口座への振込が一般的だったから、わざわざお金を下ろして帰ってきていたのかもしれない。その厚みは封筒が縦に立つほどだった。

一九七四年に施行されたいわゆる大店法（大規模小売店舗法）が、二〇〇〇年に成立した大店立地法（大規模小売店舗立地法）に取って代わられる前の時代のこと。現在、郊外に立

ち並ぶ大規模な売り場面積を有する商業施設は、原則として出店が叶わなかった。

中小の小売業にまだまだ活気があって、近くの商店街には家族経営の店がそこかしこに存在していた。スーパーマーケットも町内ごとに出店していて、消費者それぞれの生活圏に則して商売をしていた。冷蔵ケースを、「どこそこの店に販売した」と語る父の口調は、いつも誇らしげだった。徒歩圏内で各人の暮らしが成り立っていた。懐しき昭和のおわり。

まだまだ幼なかった僕の活動範囲にも、たくさんの学びと発見があった。近所の「むらかみ」というスーパーマーケットに買い物に行き、ほんの数分の間に自転車を盗まれた。夕方になると「むらかみ」のとなりの掘っ立て小屋のような焼鳥屋に、大人たちが吸い込まれていくことが不思議だった。「教育センター」という名の、古びて使われなくなった施設に冒険と称し、大勢で忍び込んで近所の人に通報され、脱出した後にパトカーが何台も来たのを物陰からみて青くなったこともあった。道路に即席のジャンプ台を作って、自転車で飛び越えて遊んでいたら、転んで足を骨折したこともあった。恥ずかしき昭和のおわり。

小学校高学年ともなると、野球が得意なやつ、サッカーが得意なやつ、ドッジボールが得意なやつと、それぞれの得意な分野が明確になってゆく。勉強よりもスポーツの出来、不出来によってクラス内の序列は決まった。僕はというと、どの球技でも自分よりうまいやつがいて、だからといって、そいつに勝つために死ぬ気で努力をするような根性も持ち合わせてはいなかった。努力は報われると割合みんな信じていて、それに伴う苦しみや根性や時間と

いったものを差し出すことで、未来は切り開かれるのだと教えられて育った。

最初の本屋体験「高松堂」

他人と競争すること、蹴落としてまで勝つことにこだわる執着心を、とてもかっこ悪いもの思っていた。努力が報われるまでの過程の不平等さに、どこか納得がいていなかったというのもある。負けの美学という言葉を当時は知らなかったけど、いつも負け方にはこだわっていたように思う。自分のなかにある納得いく「かっこ悪くない負け」の基準を達成したら、それは引き分けだと考えていた。周囲には、諦めのよい扱いやすい子に映っていたことだろう。努力することを巧みに避け、後を引かない負け方を身につけていった。

努力忌避。絶対他力。そんな貪欲に勝利を目指さないという自分のスタンスを肯定するために、本が大きな役割を果たしたことは否めない。本を読み、解釈することには幅があり、白黒つけることも正解もない。読書によって見識が広がるにつれ、負けた時の言い訳のバリエーションは増えていった。

公園での野球やサッカーが終わると、みんなで本屋に行くことが多かった。家の近くには「高松堂」という本屋さんがあって、「週刊少年ジャンプ」や漫画を立ち読みしながら、暮れなぞむ一日を惜しんだ。

毎月一五日の「コロコロコミック」が出る日を指折り数え、その日だけは学校から帰ると

すぐに、こづかいを握りしめて高松堂へと走る。三〇坪ほどの小さな本屋には、レジカウンターの椅子にいつもナチュラルパンチパーマのおじさんが座っていた。レジを打つ時の声特徴的で、頭から抜ける高い声は、僕らのモノマネの格好の餌食だった。子どもたちが大勢店にやってきて騒いでも、まったく注意を向けられない浮世離れた高松堂のおじさん。

おじさんは切手収集が趣味らしく、レジの脇でもたくさん切手を販売していた。ある時、切手ブームが僕らにも訪れて高松堂に買いに行くのと、「こっちのほうがいいやつだよ」と教えてくれた。おじさんはいま、どうしているだろう。高松堂は思い出のなかにしか存在しない。だいぶ前に、ひっそりと閉店してしまった。僕の本屋さんの原風景である。

中学に上がると、他者との違いを演出するために「週刊少年ジャンプ」から「週刊少年マガジン」へと愛読書を変えた。「激烈バカ」という四コマ漫画によって、不条理の世界を教えられ、人と同じ土俵で戦わなければそもそも負けることはないのだという、当たり前前の理屈を知ったのもこの頃である。

高校受験の時期を迎えると、週に何回か塾に通ったが、勉強も競争であると捉えていたから気乗りはしない。授業を終えた帰り道、少しだけ広くなった生活圏内にある、「BOOKS ブレイン」という本屋さんに寄ることが楽しみだった。暗がりに光る本屋は、なぜだか僕を安心させた。

さわや書店に入ってから聞いた話だが、いま一緒に働いている八つ年上の社員、竹内敦さ

んは当時、この「BOOKS ブレイン」でアルバイトをしていたらしい。知己となる以前に、すれ違っていたかもしれないという事実は、運命と縁とを感じさせる。余談だが、田口さんと僕の姉は同じ誕生日で、田口さんの娘さんと僕の息子も同じ誕生日だ。さわや書店で働いているスタッフにも、同一の誕生日の組み合わせが複数いる。日本の人口を単純に三六五日で割ると、同一の誕生日の人は三〇万人ほどいることになるが、限られたユニットのなかに、同じ誕生日の組み合わせが複数いる状況は結構まれな気がする。多分にオカルト的だが、前世か何かで浅からぬ因縁があったのかなと不思議な気持ちになる。

本を介してさわや書店に集まった僕ら。本屋に勤める人間というのは、本に引き寄せられて本屋に集まるのだと思っていたが、もっと得体のしれない大きな力が作用しているのかもしれない。

酔話のついでに、竹内さんにとりして「BOOKS ブレイン」を辞めて、さわや書店に入ったのかと訊ねたところ、当時の店長が売上金とともに出奔したからだとか言っていた。真偽のほどは定かではない。もしそれが事実だとしたら、後に竹内さんを活躍させる伏線となるのだが、長くなるのでここでは書かない。——本人に会う機会があれば聞いてみて欲しい。

さわや書店ではじめての買い物

高校に入學すると行動範囲は一気に広がった。運動部に所属したこともあって、本屋には教科書を買に行く時ぐらしか行かなくなっていた。盛岡の公立高校の教科書は「東山堂」という老舗書店で扱われていて、年に一回、盛岡の市街地へと自転車を漕いで買に行った。それ以外は、ほとんど本屋には寄りつかなかった。本を読むことなんて、年に一度感想文を提出する時に仕方なく読むぐらいのものである。購入にいたっては、年末年始にマンガ本をまとめて買に行くという感じだった。

そんな僕がはじめて「さわや書店」に足を踏み入れたのは、磨きかけた不努力が実り、めでたく浪人生となった頃だ。とはいえ参考書を買うわけではなく、当時人気絶頂だった広末涼子の写真集『R』と『H』を買いに行った時のことである。盛岡の本屋を何店舗か回ったのだったが、どこの書店に行ってもヒロスエの写真集は売り切れだった。

畜生。そういえば中心市街地に「さわやか書店」があったな。ダメもとで行ってみるか。とハンドルを大通へと向け、欲望のボルテージとともにペダルの回転数をあげた。到着して店に入ると、他店では影も形もなかったブツが、さわや書店本店にはうず高く積み上げられていたのだった。

当時の僕は出版業界について何も知らなかった。だから、他の店は売れ行きのよさから在庫がなく、さわや書店は売れ残っていたのだという認識でいた。だが、入社してその考えは誤りだったと知る。さわや書店は話題になることを見越して、しっかりと数多く仕入れてい

たのだ。入口すぐの特設台にヒロスエの写真集だけが置いてあったのは、その「仕入れ力」を誇示する、いわゆる示威行動であったわけだ。

目的のブツを無事購入して、もはや頭が欲望にまみれた僕に、さわや書店本店の他の売り場は目に入らなかつた。当然、売り場には伊藤清彦・元さわや書店本店店長がいたはずで、欲望の権化から一瞬でも真人間へと戻っていたなら、もし店の奥のほうへ一歩でも足を踏み出していたなら、僕はも、と、若い時に、「本」の魅力に取りつかれていたかもしれない。仮にそうになっていたなら、間違いなくその年の大学受験にも失敗していたことだろう。

第一書店と東山堂ブックセンター

このように、さわや書店に入社するまで生粋の「本屋素人」だった僕は、盛岡の書店事情などもちろん知る由もなかつたのだが、入社する直前の二〇〇一年二月まで盛岡市大通には三つの本屋があった。

さわや書店本店、第一書店、東山堂ブックセンターである。

さわや書店本店のすぐ目の前、盛岡で一番地価が高い場所にあった第一書店は、学習参考書や人文書が充実して一歩「格」が高い店だった。一階、二階を合わせたフロア面積は一八〇坪。当時、第一書店に通っていた常連のお客さんに話を聞くと、盛岡の「知」を育ててきたのは間違いなく第一書店だという。高校生の時に一、二度、足を踏み入れた記憶はあ

るが、正直に言って雰囲気以外あまり覚えていない。実際に棚を前にして何かを感じるほど、僕は本の世界のことを分かっていたいなかった。ただ時を経て、名古屋にある「ちくさ正文館」にお邪魔した時、なんとも言えない懐かしさを感じた。その既視感のようなものは、僕のかの第一書店の空気に似ていたからだと後になって気がついた。

当時の第一書店には、現在さわや書店と一緒に働いている田口さんが勤めており、伊藤清彦店長と読んだ本、これから売る本について夜な夜な語り合っていたという。そんな話を、田口さんがさわや書店に入社した二〇〇八年に聞いた。田口さんが第一書店で作っていた棚の前で、何も感じ取れなかった僕。はるか遠くに見えるその背中を、追いかけていこうと決意しつつ、少し悔しさを感じたことを覚えている。

向かい合う二店から、一五〇メートルほど離れた岩手公園の石垣の近くには、東山堂ブックセンターがあった。二階のワンフロアで四〇〇坪の売り場である。当時としてはとても大きな店だった。町内の小さな本屋で育った僕には、豊富な在庫に圧倒された印象しかない。「本屋素人」だった時のことを思い出しながら、この文章を書いているのだが、こうしてみると書店の「印象」というのはとても大事なのだと思う。売り場が大きければ大きいほど、お客さんは細部への関心を失うものだ。購買意欲を掻き立てるまでの「集中力」をいかに持たせられるか。力点を意識して店を作らないと、のっぺりとした印象の残らない店になってしまふ。申し訳ないけれど、僕の記憶のなかにある東山堂ブックセンターは、コミック売り場

が広がったということと、レジ前に郷土関係書が置いてあった程度のものである。第一書店に続き、翌二〇〇二年の二月に閉店した。

大通に残った一六〇坪のさわや書店本店。三国志のように互いに均衡を保っていた盛岡の中心市街地の本屋のうち二店舗が相次いで閉店したのは、二〇〇〇年に施行された前述の「大店立地法」と無関係ではない。

大規模商業施設の規模制限を目的とした「大店法」から、出店規模を問わない「大店立地法」への切り替えにもなつて、盛岡の郊外にも主要道路沿いに商業施設が建ち始めた。広い駐車場が併設されて、中心市街地のように駐車料金がかからない大きくて綺麗な小売店。その登場により、中心市街地へと集まっていた人の流れが変わってしまった。決定的だったのは、二〇〇三年に大きなショッピングモールができたことだ。

パルモ店からフェザン店へ

ライバル店舗の相次ぐ撤退により、売り上げを伸ばしたさわや書店本店だったが、それも長くは続かなかつた。大規模商業施設であるイオンモール盛岡内に全国チェーンの未来屋書店盛岡店が出店し、さわや書店本店の隣にあった独立店舗「さわや書店MOMO店」が打撃を受けた。絵本とコミックスを専門に扱う商品構成が、未来屋書店の客層、商品構成と被つたのだ。二〇〇四年にさわや書店初の郊外店となった「さわや書店上盛岡店」の開店を契機

に、MOMO店の絵本売り場の大部分をそちらへと移したのだが、これは窮余の一策と言っ
てよい。売り場面積四〇坪のMOMO店は、リニューアルを図るも売り上げは戻らず、あま
り時をおかずに本店に吸収された。

しかし、さわや書店にとって幸運もあった。それは二〇〇五年に「さわや書店フェザン
店」を開店できたことである。フェザン店の前身は「さわや書店パルモ店」といい、当時地
下にあった在来線改札のすぐ脇に出店していた。その在来線改札を、新幹線改札と連結させ
て利便性を高める目的で、盛岡駅および盛岡駅ビルフェザンの改装の話が持ち上がったのだ。
パルモ店は、通勤、通学客に利用される絶好の立地で売り上げも相当なものだったから、
一階への出店の話をいただいた時、リニューアルの期待よりも改札脇の立地を失う不安のほ
うが大きかった。いま振り返ればその危機感は、さわや書店フェザン店に来店する目的をい
かにお客さんに持ってもらうかという店作りへの萌芽だったといえる。結果的にフェザン店
はさわや書店の一番店となり、全国的にその名を知られるまでになった。もしも、フェザン
店を出店できなかつたら、いま株式会社さわや書店は存在していなかったかもしれない。

話を大通に戻す。当時の大通の書店の売り場面積の減少は、これまた全国チェーンのジュ
ンク堂書店が、さわや書店本店のすぐ裏手に出店するという結果をもたらす。

二〇〇六年に七三〇坪で出店したジュンク堂書店には、MOMO店の元店長と、もう一人

の社員がさわや書店を退社し、オープニングスタッフとして移籍した。市街地への出店はこれ以降なく、郊外に店舗を構える流れは止まらなくなる。

同年、盛岡駅から車で五分ほどの幹線道路沿いに大規模ショッピングモール、イオンモール盛岡南が開店して、そのなかに東山堂イオンモール盛岡南店が三三〇坪で開店した。絵本売り場にスペースを広く割り、ファミリー層向けの品揃えである。東山堂には横矢さんという本読みがあり、とくに岩手出身の新人作家の情報を仕入れるのが早い。

二〇一〇年には盛岡駅から車で一五分ほどの場所にあるエムズ書店が改装し、書籍の売り場を八五〇坪に増床した。この店のスタッフである天川さんは、元々さわや書店で働いており、コミックの返品率を一桁で推移させる魔術師である。緻密なデータとそれに頼りすぎない独自の感覚で、コミックの売り上げにおいても全国上位を誇る。

二〇一三年には盛岡蔦屋が開店した。一九二〇坪の売り場面積は、入口に立つと店の奥まで見渡せないほどの広さがある。真ん中にカフェがあり、それを囲むように雑貨、レンタルCD&DVD、ゲーム販売、中古本販売、そして本の売り場と配置している。この店の現店長の山本さんは、僕がさわや書店に入社した当時の先輩である。売り場面積が大きいのに、飽きさせない工夫を随所に施しているのは、さすがの一言である。

二〇一六年には、ショッピングモールの改装に伴って未来屋書店盛岡店が撤退。

二〇一七年三月には、さわや書店上盛岡店が閉店した。

二〇〇〇年以降、その数を増やし堅調に見えた郊外店舗も、近年では苦戦が続く。店舗の大規模化と複合化が加速する一方で、本の売り上げは冊数、金額ともに年々減少している。時代とともに人も店舗も移り変わるが、そのなかにあっても変わらないものもある。盛岡の書店を時系列で振り返ってみて、そう思った。

上盛岡店閉店後、「すごく好きだったのに、どうして閉店しちゃったの？」というお言葉を、店先で何度もかけていただいた。それに対して僕は答える言葉を持たなかった。本屋に限らず、小売店は裏側にたくさんの事情を抱えている。ただ、それを表に出してしまったりおしまいなのだ。裏の事情は、店先という表舞台にはおくびにも出してはいけない。表舞台で「さわや書店上盛岡店」を演じきり、そういうお言葉をいただくぐらい愛されたということには胸を張っている。

移ろう時のなかにあって変わらないもの。それは、お客さんの思い出と結びついた店舗の記憶である。僕の記憶のなかの高松堂が、いまもナチュラルパンチのおじさんとともに思い出されるように、さわや書店上盛岡店の愛された売り場のように、たとえば今日、いまこの瞬間の売り場が、誰かの記憶に一生残り続けるかもしれない。そう考えると、日々手を抜けないと身が引き締まる。

いま、そして、これから。さわや書店を訪れる人々の記憶の片隅にでも、自分の作った売り場と、売り場を作った自分が少しでも残ってくれたらいいなと、最近そんなことを考える。

2 盛岡で一〇〇回続く読書会

「リーラボいわて」という読書会

とても印象に残る夜を過ごした。

第二章でも触れたが、盛岡で月に一回開催される「リーラボいわて」という読書会がある。その一〇〇回の節目を記念して開かれた集まりに参加した時のことだ。

普段は閉店まで働くシフトが多いが、その日は一〇〇回記念に合わせ、前々から早番のシフトになるように調整してもらっていた。仕事を早めに切り上げて、夕方から開催場所へ向かおうということになった。空が明るいうちに仕事を終えたことが、今日が特別な日であることを物語っていた。朝方に降っていた雨は働いているうちに上がり、長江さんと一緒に他愛のない話をしながら、開催場所である「cafe BLUME」へと歩を運ぶ。

リーラボいわては、休日の朝に開催されることが多く、土日が忙しいフェザン店に勤務している、なかなか参加できない。少し気後れする気持ちを抱えていたので、そのことを話題にすると長江くんからは、「僕よりはいいじゃないですかあ」との答えが返ってきた。それもそうだと自然に頬が緩む。長江くんは、二〇一五年の秋に神奈川から岩手へと越してき

た。リーラボいわてに参加したことはなく、一緒に行く僕以外に知己もない。ふっつけ本番で会に臨むのだ。それというのも、行くはずだった田口さんが急用により行けなくなってしまう、当日ピンチヒッターとして白羽の矢が立ったからである。

しかし、その口調とは裏腹に、いつもの飄々とした態度を崩さない。長江さんに緊張の色は見られなかった。

開始時間の一〇分ほど前に店につくと、二五名の定員のうち八割方の席が埋まっていた。

入口の右手に設えられた受付で、小笠原康人さん（以下おがっちさん）と奥さんの純子さんに「おめでとー」と伝える。このおがっちさん夫妻が、リーラボいわての主催者にして本日の主役だ。開始時間も迫っていたので、挨拶もそこそこに促されてクジを引く。そのクジを手長江くんとともに空いていた席に座った。

八人掛けのテーブルについてほとんどなく、静かに会の開始が告げられた。前半は「一〇〇回分振り返りトーク」と題して、過去の読書会の歴史を振り返りつつ、おがっちさん夫妻へ質問を挟む形式で進められた。司会は、ご自身も読書会に参加している、プロの司会者の女性が快諾してくれたらしい。くだけた雰囲気の中、質問が重ねられていった。

盛岡市出身のおがっちさんは、元サッカー日本代表の岩本輝雄似の四〇代。読書会を始め、たきっかけは、東京に赴任した際に「リーディングラボ」という会に参加したことによる。

いつもの朝より少し早く家を出て、出社までの時間を自己の研鑽にあてるというコンセプトのもと、都内の各所で開催されていたこの読書朝食会を、おがっちさんはとても有意義に感じたそうだ。赴任期間を終えて岩手へと帰る時、岩手でもこの習慣を続けたいと考えたおがっちさんは、似たような集まりがないか調べたというが、見つからなかったらしい。それならば自分でやってみようじゃないかと、奥さんの純子さんに相談した。賛同を得て主催者となることを決めたおがっちさんは、本家の主催者へと連絡して許可を取り、「のれん分け」のような形でリーラボいわてを始めることとなった。

読書会の形式を簡単に説明すると、自分が読んでタメになった本を、他の参加者の前で内容を踏まえながらおすすしめし、その後の数分間で当該本について皆で語り合うというもの。おがっちさん曰く「自分が知らなかった本を要点とともに教えてもらい、仕事に活用できる新たな視点を得られ、そして何より会を通じて広がる人と人とのつながりが面白く、続けるモチベーションとなった」と。

相談された側の純子さんは、説明されてもイメージが湧かなかつたらしい。当時の気持ちを問われた純子さんは、「初めに相談された時は、この人は何を言っているんだろうと思うた」「おかしくなったんじゃないかと疑った」と即答し、会場が笑いに包まれる。

それでも取りあえず、やってみなければ始まらないと、第一回目の「リーラボいわて」を開催したのが、二〇〇九年六月六日。記念すべき第一回は、お試しの意味合いも込め、おが

っちゃん、純子さん、純子さんの職場の先輩の三人で、互いに本を紹介し合って終了となったという。第二回目も知人が集まるだけに終わった。

しかし、リーラボいわては徐々に広がりを見せ始める。会の様子を綴っていたブログから、雰囲気のよさを感じたという参加者が現れ始めたのだ。毎回会場を変えろというアイディアも功を奏したのか、参加者は倍々で増えていった。手ごたえを感じたおがっちゃんは、さらなるテコ入れ策としてゲストを招くことを思いつく。

第一〇回の節目に、その案を実行することを決めたおがっちゃんがゲスト出演の打診をしたのは、盛岡市内にある「さわや書店」だった。そこで働く胡散くさい書店員を、どうしてゲストに決めたのだろうか。そのゲストの名は「松本大介」という……えっ、オレ!? まさかの「代打オレ!」である。

こうした経緯でおがっちゃんと知り合い、二〇一〇年一月三〇日、生まれてはじめてゲストとして招かれるという経験をした。結果は、特大のファールのあと三振……いや、なんとか振り逃げで次につなげたところか。あの日から、おがっちゃん夫妻との良いお付き合いは継続している。

司会の方の質問が、僕を現在へと引き戻す。

一番紹介された本は

印象に残った回を問われた純子さんは、ある年の一月の水曜日の朝、大雪が降った日に開催された会のことを挙げた。おがちさんと純子さんしか参加者がおらず、お互いに本をすすめ合って終わった……「家でもよかった」という言葉に、会場がふたたび笑いに包まれる。それが原因というわけではないだろうが、その後、土日の午前中の開催が主流となってゆく。三月に開催されたある回では、年度の変わり目に転動することになった参加者が三名も出席し、お別れ会のようになくなってしまったこともあったという。その三名はその後、転動した先の読書会に参加したり、おがちさんのように自ら読書会を主催していると聞いて、会場から感嘆の声が上がった。

集計によると「リーラボいわて」で紹介された本は、全部で一七五五冊^{*}。一番多く紹介された本は、それぞれ四回紹介された『永遠の0』百田尚樹、『モンスター』百田尚樹、『夢をかなえるゾウ』水野敬也の三冊で、一番紹介された作家は有川浩さんの一回。一〇〇回分のデータ集計は、大変だったことだろう。

さわや書店から火がついて、全国に広がったといわれる『永遠の0』。作者の百田尚樹さんの作品はやはり人気だ。一番多く紹介された有川さんは、当日会場で同じテーブルになった方のなかにも、大ファンだと話す人が二人もいた。

もっとも参加回数が多い参加者は、ホストであるおがちさん夫妻をのぞき、一〇〇回中

四四回。ちなみに、おがっちはさんは九八回、純子さんが九七回の出席で、会場からは「えーっ」と意外そうな声上がる。それぞれの欠席理由は、出張や体調を崩したことによる。また、遠方からの参加者も多く、今回も関東から参加した方がいた。おがっち夫妻の人徳によるものだなと思う。

会の後半では、集まった参加者が自分のとっておきの一冊を持ち寄り、一分間その本についてプレゼンをして、紹介したその本を会の参加者の誰かにプレゼントするという「プレプレ大会」という企画で盛り上がった。おがっちさん夫妻がまえもって、参加者が何の本を紹介するか聞き、その本を購入して用意してくれたのだ。二五名分の本の購入代金のことを考えると、ホストとして参加者をもてなそうという粋な姿勢に頭が下がる。

受付の際に引いたクジには、二つの番号が書かれていた。上の数字が、自分の本をプレゼンする順番の番号、下の数字が自分がもらうプレゼント本の当選番号である。

プレゼンが終わるごとにその紹介者が箱に手を入れ、1から25の番号が書かれたクジを引き、番号が読み上げられる。その時、下の番号が呼ばれたら、クジを引いた人が紹介した本をプレゼントされるといふ仕組みだ。一回ごとに、たったいま紹介された本が自分に当たるのではないかという期待と、自分の発表する順番が近づく不安とでドキドキする。

僕はプレゼンが11番、クジの当選番号は5番。長江くんは5番目に完璧なプレゼンを終え、



「リーラボいわて」にてプレゼンする著者

その後は緊張感のかけらもなく出された料理にパクつきながら、隣に座った最年少参加者である中二の女の子と楽しそうに話していた。その肝の太さをうらやましく思う。

プレゼンの順番が回って来た僕は、三球三振とっていいくらいのグダグダのプレゼンを終え、代打の役割を見事果たした長江くんと明暗を分けた。プレゼンは順序良く進むが、僕も長江くんもプレゼント本がなかなか当たらない。

参加者の一人が、田口さんの著作『まちの本屋』（ポプラ社）をプレゼンし始め、心のなかで「オレに当たるな。長江くんに当たれ」と祈るが、結果、どちらにも当たらなかった。その時、田口本は二人とも読んでいなかったから、当たったら腹をくくって読まなければならぬところだった。危ない、危ない。長江くんの不運を願った胸の内を隠しながら、よかった、よかったとビールを注ぎあう。

僕は20番目くらいにプレゼンされた草野隆『百人一首の謎を解く』という新潮新書が当た

った。悪くない、いやむしろ喜ばしい結果だと充足感にみちる。一方、長江くんはというと、その時点でまだ当たっていなかった。そしてなんと、最後のプレゼンが終わっても長江くんの番号は呼ばれなかった。まさかの空くじかと思いきや、遅れてきてプレゼンの順番を飛ばされた参加者があり、最後の最後にその人が紹介した『十歳のきみへ』という日野原重明さんの本が当たった。好みでない本が当たったであろう心中を慮り、慰めようと待ち構えていたら、隣の中二の女の子に、一緒に来ていたお母さんのプレゼン本、美輪明宏さんの『ああ正負の法則』が当たったことをチェックしていて、席に戻るやいなや交換の交渉を成立させる。延長に突入後、代打から二打席目が回って来た長江くんは、殊勲のサヨナラヒットを放ったのだった。

閑話休題。監督が……もとい、おがっちさんが行った挨拶。

この会がなければ出会えなかった人と、本を介して出会えたことに対する感謝。そして知り合った人が、この街にいることの心強さと嬉しさを感じるという言葉に、胸が熱くなる。

「こんな私でも一〇〇回も続けることができたのだから、皆さんも自分で何かを始めたいと思ったりまずは始めてみて、走りながら何か問題が出てきたら、その都度考えながら続けていって欲しい」

最後にそんな言葉で締めくくって、散会となった。

会の後、僕が参加表明のメールに書いた「二次会にも参加する気満々です」という言葉を覚えてくれていて、お疲れだろうに二軒目の店へと流れた。

「こんな私でも」さっき聞いた、おがっちさんの挨拶を思い出す。

いや、「こんなおがっちさんだから」だろう。

気づかいの人だから皆に好かれ、一〇〇回も続いたのだ。仲良く並んで前を歩く二人の背中を見ながら、伝えるべきは「おめでとー」ではなく「ありがとう」だよなとしみじみと思う。あらたまって言うのも照れくさく、揺れる二人の背中に向けてつぶやくように、夜の街の喧騒にまぎれさせるように謝意を伝えておいた。

さわや書店を育てる盛岡の風土

盛岡には、こんなに豊かな読書活動がある。おがっちさんは、盛岡にさわや書店があつてくれてよかったと言ってくれるが、それは逆ではないだろうか。このような読書活動が行われる盛岡の人や文化に支えられることで、さわや書店は商売を続けてこられたのだ。お客さんに対して礼を尽くすあり方や、自分が知らないことを「知らない」と認めて学びの機会を逃さないようにする姿勢を、僕はこの読書会に参加することで教えられた。本屋は人によってつくられ、人は出会いによって成長する。

都心で開催されていた本家のリーディングラボは、一時の流行が収束に向かい、現在は活

動自体が廃れていると、おがっちさんから聞いた。一方で岩手へと運ばれた読書会という名の苗は、しっかりと大地に根を張って、多くの実りをもたらしている。

このことは、真面目でおとなしく、粘り強く着実に事を為しとげるといった岩手県人の特性がよく表れているなと思う。いったん自分で受け入れると決めたものは、その後とことん応援する。その在り方は、当店のお客さんに接していても感じることだ。言い換えれば、その県民性がさわや書店に、数々のベストセラーを生み出させたともいえるだろう。

この夜、迎えた一つの区切りは、きつと通過点に過ぎない。「文庫X」を企画した長江くんが、この出会いによってうちの店にもたらずものに期待して、いまからワクワクしている。そんな期待を胸に目をやると、そこには中二の女の子のお母さんと親密な空気をつくる長江くんの姿があった……根無し草め。

(※) 一〇〇回分の様々なランキングについては、<http://ameblo.jp/realab-i/entry-12176701659.html>

「リーラボいわて」開催日程や参加要項などの詳細については、<http://ameblo.jp/realab-i/>

3 人生を変えた一冊

本との出会い

「本」の、「物語」の魅力を知ったのはいつの頃だったろう。

僕の原初記憶は、絵本を片手にこぶし大の〈石〉を少し離れたところから凝視している映像から始まる。おそらく五歳くらいだと思う。前日、うちの庭に迷い込んだ犬がフンをした。それは記憶にある限りソフトボールくらいのもので、とても大きなものだった。僕と散歩をしようと庭先へと出てそのブツに遭遇した若かりし頃の母は、一瞬の動揺を見せた後、僕をその場に残して無言で家のなかへと入り、後を追おうとした僕が何歩も行かないうちに風のように戻って来た。手には白い粉の入った袋を持って、駅伝のタスキを次走者に渡すかのように前のめりになりつつ、その中身をすべて目標へとぶちまけたのだった。目標とはもちろん僕ではなく、犬のフンである。

翌日、たまたま『みんなうんち』五味太郎（福音館書店）という絵本をながめていて、昨日の犬の『うんち』のことを思い出し、絵本を片手に庭へと出た。するとどうだろう。昨日たしかに存在した場所から犬のうんちは消え去り、かわりにこぶし大の〈石〉が置かれてい

たのだ。

世の中の仕組みもあやふやで、現実と想像の境目すらあいまいな子ども時代のことである。くわえて、うんちに対して好意的なお年頃でもあった。そのブツをつぶさに観察すると、輪郭が昨日のうんちの形に瓜二つに感じられたのだった。いや、どっしり胡坐をかいたような佇まいも、少し愁いを帯びた面差しも、まさしく昨日のうんちそのものではないか。見れば見るほどその確信は深まり、「犬のフン十白い粉Ⅱうんち石」という図式が僕の頭のなかで成立した。だって、そんな不思議な事例は絵本のそこかしこに描かれていた。

いや、昔話ならここで、その奇跡の石が発端となり、何だったらその石を崇め奉って、村の宝として子々孫々まで大事にするところだろう。村の宝Ⅱ犬糞石を守る家は、いつしか「犬神家」と呼ばれて代々栄えたが、一族は佐兵衛の死をきっかけに泥沼の相続争いを展開。そして湖面には、逆さまの状態で突き出た足が……。うん、どこかで読んだことがある。横道制止。

なにせ昨日まで、犬のフンだった「うんち石」である。幼いながらも真実を見極めようと僕は彼(?)との時間を共有した。幾ばくか静寂の時間が流れ、微妙な距離感を保ったまま互いの領域に踏み込めなかった僕は、そのまま別れを選択し、存在を意識しつつも遠巻きに眺め合う関係に落ち着いた。臭い仲を解消した僕らの間は流れて、うんちを石に変える魔法の粉があるから、突然の腹痛に苛まれ「うんち」を漏らしても大丈夫という心の支えを

得て、僕は伸び伸びと幼少時代を過ごしたのだった。

つまり何を言いたいかというと、大人になつたいまでは体験できないような人智を超えた邂逅の時に、僕の傍らには「本」があつたということだ。その理由は簡単である。幼少期から小学校卒業までの期間、誕生日のプレゼントは例外なくすべて本だったからだ。

白い粉の使い手である母親は学生時代に理系であつたという。そして特に国語が苦手だつた。母はそのことをコンプレックスに思っていて、三歳上の姉と僕に対して本を読むことを奨励した。のちに僕は、食塩の濃度を求める問題でつまづいて数字に苦手意識を持つことになるのだが、「白い粉は固形物にかけるもので水に溶かすものではない」という先入観が影響していたのではないかと、訝しんでいる。

無限の選択肢にあふれた人生も、きつとこうして何かしらの偶発的な体験を積み重ねることとで、狭まってゆくのもかもしれない。

一〇代の頃の読書

小学校に入学すると、僕の読書熱はいよいよ高まつたかというところでもなかつた。親の転勤により、田んぼのと真ん中に位置する仙台市内の小学校に通うことになり、本とは無縁の自然児生活を送る。その当時、本はまだ与えられるものだった。なぜなら近くに本屋が一軒もなかつたからだ。

そんな折、夏休みの前に学校の推薦図書販売する催しがあった。母にねだって、はじめて自分で選んだ本のことはいまでも覚えていて、プリントに書かれた十数冊のなかから僕が選んだのは、『おんぼろクッペ空をとぶ』（財団法人兒童憲章愛の会）という本だった。新しい車を買った家族が、下取りに出す前の古い車に乗って空を飛ぶ（たしか夢オチ）という内容の本。自分で選んだことが嬉しくて、何度も何度も読んだ。盛岡に帰る車中でも読んで、車酔いで具合悪くなったほどだ。うちの車は残念ながら飛ばなかった。

中学生になって国語の成績が良かったのは、幼少期の読書量と無関係ではないだろう。それに気をよくして、三歳上の姉の部屋へと忍び込んで本を物色。皆川ゆかさんの『ティーン・パーティー』シリーズ（講談社X文庫ティーンズハート）など、こんな面白い本が世の中にあるのかと夢中で読んだ。高校時代は部活に明けくれ、ほとんど読書はしなかったが、自分より本読みの友人から教えてもらった京極夏彦だけは押さえていた。やはり国語の成績だけはよかった。読書好きにしてくれた母に感謝しなければならぬだろう。そして大学進学時、学ぶ対象として興味があることは「文学」以外には考えられなかった。それは選択したというより、それしか手の内になかったという感覚である。

このように、自らすすんで隘路に迷い込んでいったような僕の人生だが、本を読み続けてよかったことは、人生を一変させるような著者と出会えたことだ。就職してから読んで影響を受けた作家、本田靖春さんや外山滋比古さんの名前は、方々で挙げさせてもらっているけ

れど、これまで人にあまり言っていない心に秘めたる作家が一人いる。

本に（呼ばれる）という体験

大学一年生の夏。二〇歳の誕生日を迎えて、表面的にはそれなりに充実していたと思う。一年の予備校生活のすえに都内の大学に入り、多くはないが友達もできた。何かが変わるのではないかと期待して金髪にもしたし、血迷ってピアスの穴もあけた。田舎モンだと覺られないようにファッションにも気を配った。だけど、まったく楽しくなかった。その当時、つねに自分に付きまといていたのは、自分が何者であるのかという根本的な問いだった。

きっと何者でもありたくはなかったのだろう。他人との差異に一喜一憂する一方で、自分のやることなすこと、そのすべてに価値を見いだせなかった。自分は無価値なのではないだろうか。そして次第に、自分が自分として存在すること自体に疑問を感じていった。

何かしらの行動を起こし、もたらされる結果に対して意味づけすることに疲れ、だったら何もしないほうがいい。いまの「この場所」がゴールであり、最高到達点であるような気がしてならなかった。これからの人生を傍観者として過ごす方法を本気で探して、見つけれられず、あやうく自分探しの旅にでも出かけるところだった。いまいるこの場所から逃れられぬならばと、毛嫌いしていたタバコに手を伸ばしたのも、ゆるやかな自殺のつもりだった。

それでも日々は変わらない。変わらない日々が辛い。周りを見れば、みんな楽しそうに

している。自分はそれに合わせていた。みんなが信じる価値観が正しいと、どうしてみんなは信じられるのか。そんな疑問を抱きながら、それでも梓組みからはみ出せない自分がいた。

当時の内面を書き連ねながら、通過儀礼のようなものだといまは思う。誰しもとは言わないまでも、多くの人が似たような思いを抱く時期があるだろう。だけど当時は切実な問いだった。空に果てがないように、この疑問はたどり着く答えを持たないままに広がり続けた。

それまでの読書歴では、それらの気持ちに対する答えやヒントには出会わなかった。いや、僕が気づかなかつただけなのかもしれない。口当たりの良い、なぐさめにもならないような言葉ばかりが目につく。僕はそれらを疑い、こき下ろすことで人格が形成されてきたようなところがあった。

たとえば、当時のベストセラー『小さいことにくよくよするな!』リチャード・カールソン（サンマーク出版）の題名についている「!」の部分が気に食わない。くよくよしている人間に対して、どうして命令口調で追い打ちをかけているのかと、どうでもいいことに憤って自ら遠ざけていた。きっと僕みたいな、小さなことにこだわる人間が読むべき類の本だっただろうに。

ある時、みぞおちのあたりに鈍い痛みが走った。しばらくすれば治るだろうと放っておいたら、痛みはどんどんずんずん増していく。二日経っても痛みがひかず、我慢しきれなくな

って、近くの内科に行こうと思いついた。頭と身体は別物である。痛いのは嫌だ。

しかし内科へ向かおうにも、一步ごとに痛みがひびいて、歩くことすらままならない。痛い。痛い。痛い。いと念仏のように唱えながら、いつのまにか（ゆっくりとした）自殺願望は、どうでもよくなってしまうていた。だって、痛いのは嫌なのだ。痛いなら死にたくない。脂汗をたらしながら、二〇〇メートルの道のりを一〇分ほどかけて、ようやくたどり着く。医者はおろくに診察もせずに、問診だけで「神経性胃炎だね」と決めつけた。直接は関係がなさそうな対人関係にまで及んだ、痛くもない腹を探るようなその問診に（実際に腹は痛いのだけれど）、そんなわけはない、もっと重大な病気だから、いまに見ていろと腹の中で気炎を上げる。だが、その気概もむなしく処方された薬を飲むと、翌日に胃炎はあっさりと治った。そんな無益な苦しみも積み重なって、体重が一五キロほど落ちた。霞を食う仙人ならぬ煙を吸う凡人の日々。大学の課題をこなす目的でふらりと入った古本屋で、僕は運命の一冊と出会う。その本は僕を待っていた。強烈な存在感を放つその本に導かれた感覚を、僕はいまもありありと思いつける。後にも先にも「本と呼ばれた」体験は、あの時をおいて他にない。

人生を変えた一冊

その本のタイトルは色川武大『狂人日記』（講談社文芸文庫）という。

タイトルに引き寄せられ、手に取って読み始めた内容は、どんなポジティブな言葉よりも

己を肯定してくれるものだった。『狂人日記』とはそのタイトルのとおり、自分を狂人だと認識している主人公が書いた日記文学であり、色川武大その人の経験をもとにしているといわれているが、僕には自分の未来が書いてあるように思えた。

本書で、主人公は現実と妄想を行き来しながら暮らしている。物語も終盤にさしかかって、病気を承知しながら同棲することを提案してくれた女性に去られ、主人公は妄想のなかで弟にこう語るのだ。

「人間という奴は、とことん、わかりあえないと思っちゃったよ。服装や言葉や生活様式や顔つきまで似てくれば似るほどに、似ても似つかない小さな部分が目立ってきて、まづいことに、皆、その部分を主張して生きざるをえないものだから、お互いに不通になっちゃう」

（『狂人日記』講談社文芸文庫 二七二ページ）

この文章に出くわして、僕が抱いてきた感情が、生きるうえで切り離せない哀しみであることを知った。生まれ落ちて、自分の身体と精神で生きてきた、生きてこなければならなかった哀しさ。どうして「自分」でなければならなかったのか。できれば自分ではない他人になりたい、それが無理であるならせめてなりたい他人と深く交わりたいと思うのだけれど、同時に恐れから他人を遠ざけてしまう。その感情は自然発生的なもので、僕だけのものでは

なかったのだと教えてくれたのだった。

この弟とのやり取りは次の一文で結ばれる。

「俺も誰かの役に立ちたかったな。せつかく生まれてきたんだから」

平易な言葉で綴られた、人生の悲哀を凝縮したようなどこまでも優しい一文。人に対しての優しさは、ときに自分に対する刃になる。他人を守るためにとった行動が、自分を傷つけ少しずつ積み重なることで壊れてゆく。優しさを分け与えているのに、こんな矮小わいしょうな自分が他人を救えるとは思っていないから、誰かの癒しになっているなんて思わない。どこまでもすれ違うのが人生なのである。それは哀しいけれど本質として、いまも僕のなかにある。

当時を思い返しながら考える。五歳のあの日。うんち石との別れと、その後のすれ違いは必然だった。そもそも「うんち石」に対して僕は、本物のうんちが姿を変えたものだという誤解をしていたのだから。だと幼少期の僕はきつと、母が白い粉をかけたことよって姿を変えることになってしまった「うんち石」の魔法を解いてあげたいと考えていたはずだ。

僕が色川武大の優しさに触れて自己を取り戻したように、僕も僕の優しさで「うんち石」を、本物のうんちに戻してあげたかったのだ。決して触れはしなかっただろうが。

4 二〇〇八年の転機

二〇〇八年の二つの「あの日」

『船に乗れ!』藤谷治(小学館文庫)という小説が好きだ。

内容はあえて割愛するが、この本は自分のなかの「心のベストテン」最上位である。自分の読書については五章でも後述するが、本屋に勤めていると、読みたい本以外に「読まなければいけない本」に時間を割かなければならない。旬の時事ネタをテーマとする本など、お客さんに勧めていいか判断するための読書がこれにあたる。畢竟、もう一度味わいたい本は「いつか」を信じて後回しになる。

このタイトルの「船」とは、人生における新しいチャレンジを象徴するものだ。自分だけが乗る船ならば、乗船も出港も躊躇はしない。だが、会社という乗り合い船を定めた目的地まで運ぶことはまた、意味合いが異なる。乗り合い船ではそれぞれに役割がある。

船頭多くして船、山に上る。

金言ではないだろうか。さわや書店という小さな船でも、方向性を失わないためには「自

分」の感情や思惑を押し殺すことが必要だった。頼れる同僚たちのサポートに徹しようとした。「あの日」からこれまでの日々を、振り返ることが多くなった。はたして自分の判断は正しかったのだろうか。

「あの日」の始まりは、それよりも少し時をさかのぼった「もう、一つ、あの日」に起因する。確信をもって先の先まで見通し、危機を事前に察知して、船に大きな釣果をもたらしてきた存在の喪失。背中を追いかけて続けた「船頭」伊藤清彦・元さわや書店本店店長を二〇〇八年一〇月に僕たちは失った。

ドラクロワが描いた「自由の女神」よろしく、皆を導く強烈な個性がいなくなった後、間をおかずに顕在化した諸問題に、僕たちは頭を抱えたまま右往左往していた。竹内敦、栗澤順一、田口幹人、そして僕。有志四人で声を掛け合い、集まってはみたものの堂々巡りの不毛な議論が続く。

当時のフェザン店には、本店の伊藤店長よりいくつか年齢が下の大池隆店長がいた。好々爺然とした雰囲気を感じ、皆に愛される人格者である。伊藤店長が去った後、しばらくは大池さんを旗振り役として伊藤店長の穴を埋めようと一丸となってやっていたが、いかんせん大池さんが就いていたフェザン店店長の業務は、多忙すぎた。さわや書店の旗艦店として盛岡駅ビル内に店を構え、売り上げに注意を払いながら人員の調整をし、店子として大家との交渉事もこなす。本屋なのに本を読む暇もない。紺屋の白袴を地でゆく忙しさだ。

会社全体のかじ取りとの両立はどう考えても無理な話で、組織図を見直す必要に迫られていた。一一の支店からなる「株式会社さわや書店」を把握して方向性を決めるには、全体を俯瞰する業務に重きを置かなければならないというのが、社員全員の一致した見解だった。

つまり、大池さんに求められた役割とは、船頭のそれである。店内の「売り場」に関わることは一部に止め、各支店の強みやコンセプトを把握したうえで、「株式会社さわや書店」として目的地をどこに定め、進むのかという決定をすることだ。もしそうなると、フェザン店の切り盛りは大池さんの仕事とは切り離して考える必要がある。現場において核となる世代の僕ら四人は、自主的に集まってこれからについての話し合いを持ったのだった。

苦戦する本店

本章の1節の通り、二〇〇〇年代の中頃は盛岡に大型チェーン店が進出したことによって、売り上げが急激に目減りした時期だった。一番あおりを食った本店は、最終的に売り上げの半分ほどを失った。コストカットや利益構造の改革によって純益を死守しようにも、その減り幅が大きすぎて焼け石に水である。この泥船に、これ以上乗っけても沈んでしまうだけだと、早々に下りてゆく先輩も何人かいたが、僕らはそろって残ることを決めた。

先を考えての行動ではない。僕らはまだ三〇代で、失敗しても正直ギリギリやり直しがきくだらうという打算も心のどこかにはあったかもしれない。だが、何よりも大きく心内を占



初の郊外店となった上盛岡店。残念ながら2017年閉店

めていたのは、僕らを引っ張り続けてくれた、いまはいいない船頭の後ろ姿だった。一も二もなく残ることを決めた四人だったが、今後について語り合えば、語り合うほどに立ち現れる厳しい「現実」を前に、次第に口数も減っていった。

先に、さわや書店は一一店舗からなると書いたが、僕が入社した二〇〇一年から、その店舗数はほとんど増減がない。それは赤沢桂一郎社長が、スクラップ&ビルドを念頭において経営してきたからである。時代にそぐわなくなった不採算店舗は消え、代わりに新店舗を出店するということが幾度かあった。

一一店舗というとなれば、身軽な立ち回りに思えるかもしれない。だがそれは、支店のほとんどがスーパーマーケットの一角に、わりあいひっそりと出店しているからだ。だからこそ成し得たフットワークの軽さであろう。

そのなかでフェザン店、本店および上盛岡店（二〇〇四年四月―二〇一七年三月）の三店舗は、合わせると売り上げの三分の二を占める主要店舗であった。僕ら四人は、それぞれが店

の二番目の責任者（次長）の立場で、自分が担当する売り場の知識を深めてはいても、店舗の全体に目端を利かせるような立場、働き方をした経験はまだなかった。

竹内さんと田口さんが、大池さんの下でフェザン店の売り上げを伸ばす一方、栗澤さんと僕は、伊藤天照大神がお隠れになった後の、太陽光の差さない本店でジメジメとした心持ちのまま、万年梅雨がごとき日々を過ごしていた。すぎるような思いで宴会を催せども、天岩戸は開かなかった。そもそも聞く前からそこには誰も隠れてはいなかったのだから、ただただ酒を流し込んで宴会は終わった。栗澤さんがいまでも夜な夜な深酒を繰り返すのは、当時の名残であると僕は踏んでいる。

そんなふうにも明と暗がくつきりと分かれていた僕ら四人が、店の今後を考えながら問題点を指摘し合う。解決策への提言について沈黙の時間が増えてくると、話はおのずと主が不在の上盛岡店をどうすべきかということになった。

課題だった上盛岡店

「盛岡の姜尚中」との異名を持つ栗澤さんは、その日も囁くような声色で見解を述べた。曰く「この中の誰かが上盛岡店で働くべきではないか」と。半分ぐらい聞き取れなかったが、確かにそのようなことを言った。

さわや書店本店の二階フロアで専門書を担当していた栗澤さんは、一階フロアで一般書を

担当する僕とは業務が明確に分かれていた。ゆえに分業はしやすかったのだが、近隣のジュンク堂書店の豊富な品揃えによって、もともと打撃を被ったのが二階フロアだった。それは後に、栗澤さんの運命を大きく変えてゆくことになるのだが、もう少し先で述べる。

栗澤さんの「この中の誰かが……」という、ミステリ小説の探偵役のような指摘は、本店組の僕らに向けたものではなく、フェザン店組二人に対して暗に決断を迫る発言だった。つまりは、明確に業務の線引きがされていない、フェザン店組の、竹内さんと田口さんのどちらかが上盛岡店で働くべきではないか、そういう提案であった。

二〇〇四年、当時の流行の波に乗り遅れまいと、さわや書店初の「郊外店」と位置付けられた上盛岡店。その近くには、さわや書店と同じく地場の書店チェーンである東山堂の郊外店があった。

直線距離にしておよそ二キロ。自家用車が主たる移動手段である盛岡において、二キロはものの数分で移動できる「お隣りさん」と言っていぐらいの距離感である。ここであえて「直線距離」と書いたのには理由がある。二〇〇四年当時、二店舗間は山によって隔たれており、街側の住宅街をさわや書店上盛岡店が、山側のベッドタウンを東山堂三ツ割店がというように商圏のすみ分けができていた。二店舗間を行き来しようとするならば山を避けて、大きく迂回する必要があったのだ。単純に商圏だけを考えると山の存在はありがたかったが、一方でベッドタウンから街中へと流れる通勤時間帯の迂回路の交通量が問題となっていた。

渋滞を緩和するための解決策として、山にトンネルを開通させる都市計画が持ち上がり、二〇〇八年には開通が間近に迫っていた。直線道路で結ばれると商圏がかぶってしまうことは明らかで、顧客の奪い合いとなる。

開店以来、苦戦が続く上盛岡店のテコ入れを、このなかの誰かがしなければならぬ。誰も口にはしなかったが、竹内さん、田口さんのどちらかが店長として異動することは既定路線だった。

二人の先輩——天才とスペシャリスト

ここで先輩社員の竹内敦さんについて説明したい。「病める、天才」——竹内さんに関して、は正直そのひと言で充分ではないかとも思っている。

竹内さんは、僕の小、中、高校の先輩である。とは言っても年齢が八つ離れているので、在学中はもちろんその存在を知るべくもない。後について来る者がいるとはつゆ知らず、僕がこれから進もうという道をひと足早く踏み固めながら、盛岡市周辺で四番手くらいの普通高校に入学した。全国偏差値では五〇を切る、歴史の浅い名ばかりの進学校で、竹内さんは地元国立大学の人文社会学部に現役で合格する。僕らの高校のレベルでは、学年順位が上位でなければ合格しない。進学を希望する生徒にとっては上々のその成果を、竹内さんはあっさりと手放す。なんと一年も通わずに大学を退学してしまったのだ。そして信じられないこ

とにその数カ月後、弘前大学の医学部に入り直すという離れ業をやったのける。代々医者の家系というわけではない。特段の理由もなく純粹に興味オンリーで、文系から理系へと進路を変えたのだという。

しかし、残念ながら医学に対する興味も長くは続かなかつた。弘前城の桜をやり過ぎすと数度。散りゆく桜を尻目に、懇意になつた教授に少なくない額のお金を借りたまま出奔、そして中退。盛岡へと舞い戻り、件の小さな本屋さんでのアルバイトとパチプロという二足の草鞋を履くも、両足ともに紐が切れ、さわや書店に草鞋を脱ぎ、現在に至る。

二〇年ほど勤めた現在は「辞める」病は再発していいない。わずかに医道への未練が垣間見えるのは、看護師の奥さんと所帯を持ったことくらいだろうか。周囲の天才との評価はダテではなく、誰も考えつかない切り口で構成される売り場とフェアは、ときに誰にも理解されなかつたりする。近年、話題になつた文庫川柳も竹内さんの発案だ。

そんな竹内さんと、田口さんのどちらが上盛岡店の店長になるかが当面の問題だったが、ほどなくして年齢も社歴も上の竹内さんが店長として異動せよという内示が出た。一緒に励まし合つて頑張つてきた僕ら。同世代四人のなかから店長が誕生したのは、素直に嬉しかつた。郊外店のノウハウを持たないさわや書店のモデル店。竹内店長は孤軍奮闘して売り上げを伸ばしたが、限られた商圈や認知度が上がらないこと、固定費の高さなどの諸々の理由から、利益を出すことはなかなか難しかつた。

一方、本店の二階フロアの売り上げは危険水域が近くなっていた。専門書という扱いの難しいジャンルのスペシャリストであった栗澤さんを、二階フロアの専属スタッフとして配置することは難しくなっていた。フェザン店の二人を対岸の火事とばかりに見ていた僕ら本店組だったが、社員一名で一、二階フロアを統合して運営することが決定し、栗澤さんが僕が本店から異動しなければならぬ状況が訪れたのだった。危険水域の売り上げに加えて、こちらに燃え移った火の勢いのほうが強い。大火である。

そんな折、栗澤さんが得意とする専門書の分野を強化した売り場作りを目指すという方針がフェザン店から打ち出され、請われる形で栗澤さんの異動が決まった。渡りに船とばかりに、すでに鎮火した対岸へと栗澤さんは渡っていった。

栗澤さんが異動してから三年間、フェザン店では比較的安定した状態が続く。だが、二〇一一年の震災をきっかけに、さわや書店のあり方自体が新たな局面へと動き出すこととなる。震災で傷ついた故郷・岩手県のことから考えると、本屋が復興に貢献できることがあるのではないかとの議論が社内で交わされ、そのためには地域との連携が不可欠であるとの結論に至った。それならば、誰かが外商部として「顔役」を勤めなければならないだろうとの意見が大勢をしめた。またもや「この中の誰かが……」問題勃発である。

店頭で本を売るだけではない。すべてのことが「商い」となり得る。これまでのさわや書店にとっては前人未到の仕事。手を挙げる者は誰もいなかった。未開拓の分野、苛酷な外商

苦勞が目に見えているのに、誰がやるというのだろう。決定が棚上げされたまま数日が過ぎ、火中の栗をすすんで拾ってくれたのは栗澤さんだった。あの事件の名探偵役が、まさか犯人として名乗り出るとはびっくり……そう茶化すことすら憚られる状況。相当の覚悟を要したことは、察するに余りある。それまでのキャリアを捨て、一から積み上げることを決意した栗澤さんは現在、外商部の部長としてさわや書店にとって大きく『新しい』売り上げをもたらしにくれている。

集会や講演会などの出張販売に行くことはもちろん、そこで築いた人脈によってさわや書店主催の講演会を主催したり、地元の浅沼醬油店さんとコラボして減塩醬油を作り、書店店頭で販売したりと大忙しだ。二〇一七年の冬には、使わなくなった僕たちのエプロンを南部裂織さだりという伝統工芸の技によって、限定一四〇枚のブックカバーとしてよみがえらせた。その試みはウェブ上で話題を呼び、二七〇〇円というお高めな値段にもかかわらず飛ぶように売れた。このように店頭で本を売っているだけでは生み出せない、新たな売り上げを創出している（もちろん、栗澤さんの酒量はそれに比例して増えた）。

二〇一七年の新店舗 ORIORI のコンセプト「体験型」も、栗澤さんが地道に積み上げてきた活動の延長線上にある。ちなみに二〇一七年三月末、上盛岡店はひっそりと閉店を迎えた。いまなお社長のスクラップ&ビルドの精神は健在のようである。

自分に足りなかったもの

伊藤店長の退職以来、大池さんを旗振り役に四人で主要店舗の現場をやってきた日々。他の三人が自分の場所を定めて活躍の場を広げるなかで、僕ひとりが置いていかれたような気がしていた。そんな僕は、伊藤店長が作り上げたさわや書店本店というブランドイメージを裏切らないように、自分の意思というよりも「伊藤店長ならこうするだろう」という基準のもとにすべてを判断するという時期を過ごしていた。

ことあるごとに「四人で」と、合言葉のように持ち出されるそれに、どこかで引け目を感じている自分がいる。最終的に責任を問われることのない自分の発言は軽い。他の三人に比べて、どうしても軽いのだった。

そのことを悔しく思った僕は、ふがいない自分への戒めとしてプライベートでも付き合いのある三人の呼び名に必ず「店長」もしくは「部長」をつけて呼ぶことを、自らに課した（ただし、栗澤さんだけは「栗澤宴会部長」と呼んでしまいそうになるので、一度も呼んだことがない）。次長職に徹して「いつか」に備える。自分にできる精一杯のサポートをしようとの決意を固めたつもりだった。

伊藤店長がいなくなってしまった「あの日」と、自分は漕ぎ手としてサポートに徹しようとしたと決めた「あの日」——望まずに訪れた「あの日」と、自らの決意によって選び取った「あの日」。後者の「あの日」は、僕を成長させたのだろうかと思問するが、答えは出ない。む

しろ一步引いたことは、誤った選択だったのかもしれない。

だがこうも考える。決意自体が誤りだったわけではなく、決意した後の日々のなかでどれだけ具体的に来るべき「いつか」を頭に置いて、日々を過ごしてきたかなのだろうと。僕に足りなかったのはその気構えだ。

だって、いざ訪れた「いつか」に、店長の内示にいまの僕はこんなにも困惑している。何も考えずにがむしゃらに過ぎ、できることをやるしかないと思いついた日々の先に、いま僕は立っている。店長として働く「いつか」に対する備えを怠った僕は、「これから」の日々のことを「いま」必死に考えているところだ。

反省しつつ振り返って思うことは、自ら何かを決定し責任を取る船頭の仕事とは、こんなにも怖いことだったのかという驚きだ。三人に対し尊敬を込めて「店長」「宴会部長」と敬称をつけて呼ぶ日々は、まだまだ続きそうである。

もしかしたら僕の差配する船だけ、いつか山に登ってしまうかもしれない。